



## 統合失調症患者におけるクロザピンと虫垂炎発症の関係： 後方視的研究

クロザピンは国内外のガイドラインにおいて治療抵抗性統合失調症の第一選択治療として推奨され、本邦において唯一治療抵抗性統合失調症に対して適応を取得している抗精神病薬です。その有効性は確立していますが、無顆粒球症、心筋炎、高血糖などの重篤な副作用が生じることがあり、定期的な検査が必要です。最近、これらの副作用に加え、クロザピンが虫垂炎のリスクを上げるのではないかという研究が報告されましたが、その研究は対照群のない観察研究で、追試はされていませんでした。

今回、市立秋田総合病院の川北雄太医師、秋田大学大学院医学系研究科精神科学講座の竹島正浩講師、三島和夫教授、伊藤結生助教、今西彩助教、藤原大医員、能代厚生医療センターの小松和音医師らの共同研究グループは、2009年6月～2021年8月の間に秋田大学医学部附属病院精神科を受診した統合失調症の患者さんにおいて、クロザピンを服用していた患者さん（クロザピン群）65名とそれ以外の抗精神病薬を服用していた患者さん（非クロザピン群）400名の間で、虫垂炎の発症率と累積発症率に差があるかを後方視的に比較しました。

その結果、クロザピン群は非クロザピン群に比べて、観察期間中の虫垂炎の発症率が有意に高いという結果でした（10万人年当たり863例 vs 124例）。特にクロザピンの曝露期間に限定すると、クロザピン群の虫垂炎発症率は10万人年当たり2,086例と極めて高く、非クロザピン群の約20倍の発症率でした。さらに多変量解析により、クロザピンへの曝露が虫垂炎の発症に寄与する独立した因子であることが示されました。

本研究よりクロザピンが統合失調症の患者さんの虫垂炎発症リスクが高めることが示唆され、クロザピン服用中の患者さんは既知の副作用に加え、虫垂炎にも注意して経過観察される必要があるかもしれません。将来、クロザピンによる虫垂炎の発症機序が解明されるとともに、虫垂炎発症のハイリスク群の同定や、発症予防策が開発されることが望まれます。ただし、本研究は小規模な後方視的研究であるために、本研究の結果を確認するためには、さらなる研究が必要です。

本研究は、科学雑誌『BMC Psychiatry』に10月21日付けで掲載されました。

### 【問い合わせ先】

(研究内容)

秋田大学大学院医学系研究科

精神科学講座

講師 竹島正浩

電話：018-884-6122

Email：m.takeshima@med.akita-u.ac.jp

(その他)

秋田大学医学系研究科・医学部総務課長

飯塚 博幸

電話：018-884-6005 / FAX：018-884-8619

Email：iizuka@jimu.akita-u.ac.jp